

タブレット端末を活用し、個々に 応じた家庭学習で意欲を伸ばす

神奈川県 川崎市立南百合丘小学校

川崎市立南百合丘小学校では、2011年度からICTの活用に関心をもち、授業だけではなく、家庭学習でもタブレット端末を中心としたICTを活用し、学力や意欲の向上につながる課題のあり方を模索している。取り組みは3年目を迎え、徐々に成果が表れ始めている。

取り組みのねらい

- 積極的に自分の力で問題を解決しようとする姿勢を育てる
- 学力の二極化に対応する

取り組みの内容

- 電子黒板や1人1台のタブレット端末などを活用した授業のあり方を検討
- タブレット端末を活用した家庭学習で、学校と家庭の学習をつなぐ
- 保護者にもICT活用の理解と協力を求める

取り組みの成果

- 自分のペースで反復学習に取り組むことで、基礎・基本の定着が進んだ
- 皆が進んで発表するようになるなど、授業中の発表活動が活発化した
- 異なる学力の子どもへのアプローチの仕方が見えてきた

S c h o o l D a t a

◎1969(昭和44)年、川崎市立百合丘小学校から分離・独立して開校。多摩丘陵に位置し、学区にはなだらかな起伏のある住宅街が広がる。2006年度から2学期制を導入している。



校長 和田淳二先生

児童数 666人 学級数 21学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒215-0017 神奈川県川崎市麻生区王禅寺西1-26-1

TEL 044-966-6376

URL <http://www.keins.city.kawasaki.jp/2/ke210401/>

公開研究会 2013年12月5日(木)

●取り組みのねらい

ICTで学校と家庭をつなぎ 新たな学びを模索

川崎市立南百合丘小学校は、東京のベッドタウンとして発展してきた川崎市麻生区の中心地にある。教育熱心な家庭が多く、中学受験をする子どもも多い。学力は全体的に高いが、二極化が進む傾向が見られるという。

子どもたちは素直で協調性があり、友人関係も良好で、校内は穏やかな雰囲気だ。半面、前向きにとらえ、チャレンジしようとすることに消極的な面が見られることもある。和田淳二校長はこう語る。

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

「自分の力で解決するより、大人に任せたり、助けを求めたりしようとする傾向がやや見られます。生きる力を付けるためにも、自分の問題は自分で悩み、解決法を模索する経験を積ませたいと考えています」

こうした課題に対応し、社会で求められる力を育てる1つの手段として、ICTを活用した教育活動に可能性を見いだしている。

「ICTの活用によって、子どもはさまざまな情報に触れます。情報を取捨選択し、自ら活用しようとする経験を通して、社会を生きていくための大切な力が育つと考えています」(和田校長)

同校がICT活用に力を入れ始めたきっかけは、2011年度にNTTグループ「教育スクウェア×ICT」の実施対象校となったことだ。これは、ICTの活用により「新たな学びの実現」を目指したプロジェクトだ。対象は小学5年生(算数、理科、社会等)、中学生(英語)で、現在、全国11の小・中学校が参加している。同校には、教室に電子黒板とプリンタ、デジタル教科書を設置し、5年生には一人ひとりにタブレット端末1台が配布された。更に、授業計画制作ツールや授業支援システムを導入し、5年生の各家庭にもブロードバンド回線が整備されるなど、職員室・教室・家庭をつなぐICT環境が整備された。

当初、教師には戸惑いがあったと、昨年度5学年主任だった、現6学年主任の谷澤伸英

先生は振り返る。

「教師は授業でICTを使って何が出来るのかと手探りの状態でしたが、子どもの関心を引くことは間違いないと感じていました。1人1台のタブレット端末は、子どもの学力

や興味・関心に応じて学習意欲を高めるツールになるという思いで取り組みました」

教師の予想通り、子どもはタブレット端末に強い関心を示し、授業で使い始めると楽しんで操作し、「もつと使いたい」という声が挙がった。ICTに理解を示す保護者も多

いと、国嶋信教頭は話す。

「教育熱心で社会の動きに敏感な保護者が多いため、ICTや英語を『道具』として身に付けさせたいという意向を強く感じます」

● 取り組みの内容

タブレット端末を活用し 発言や理解を支援する

授業では、どのような場面でICTを活用し、子どもの学習意欲を喚起しているのか。

理科では、タブレット端末で動画を見ながら、メダカの生態や雌雄の違いを学んだり、植物の生長過程を追ったり、観察を補完するツールとして活用する(P.20写真)。5学年主任の吉谷良子先生はこう説明する。

「動植物の観察は時間が掛かり、大切な瞬間を見逃すこともよくあるので、動画で重要なポイントをきちんと伝えて、関心を引き出



川崎市立南百合丘小学校校長
和田淳二 わだ・じゅんじ
「子どもの成長を願い、教職員の力を結集し、子どもが喜んで通う学校をつくりたい」



川崎市立南百合丘小学校教頭
国嶋信 くにしま・まこと
「乗り越える体験をさせて、たくましい育ちをサポートする。そのことの大切さを保護者にも伝える」



川崎市立南百合丘小学校
谷澤伸英 たにざわ・のぶひで
6学年主任。「勉強も遊びも楽しく協力して乗り越えられるように支援し、粘り強く取り組み子どもを育てたい」



川崎市立南百合丘小学校
吉谷良子 よしたに・りこ
5学年主任。「一人では感じられない楽しさ、皆だからこそ感じられる楽しさのある学校や学級をつくる」



川崎市立南百合丘小学校
中島清香 なかじま・さやか
5学年担任。「思いやりを持って人とかわり、それぞれが認め合う居心地の良いクラスをつくる」



川崎市立南百合丘小学校
田口祥 たぐち・しょう
5学年担任。「子どもたちが学び合ったりかわり合ったりして、慣れ合いではなく高め合える学級をつくる」

しています。紙の資料よりも、動画は印象深く、記憶に残りやすいことも利点です」

学び合いでICTを活用することも多い。特に発表活動を深めやすくなったと、5学年



写真 5年生のICTを活用した授業。オモチャカボチャの花粉を顕微鏡で観察後、タブレット端末で花粉の性質を説明する動画を視聴して理解を深めた

担任の田口祥先生が話す。

「1人の考えを全体に広げるために、以前は早く問題を解けた子どもにもホワイトボードに書いてもらっていましたが、今は書画カメラでノートを映しながら発表しています。ホワイトボードよりも見やすく、発表者が偏らないという良さもあります。以前より多くの子どもが自信を持って話し合いに参加するようになりました」

ドリル、調べ学習、素材の撮影 1台で家庭学習の幅が広がる

タブレット端末によって、授業と家庭学習の動機付けも高められた。同校では、家庭学習は主に復習を課し、授業内容の定着を図っている。通塾率が高いため、負担になりすぎ

ないように課題を設定しているが、塾に通わない子どもの保護者から「もっと出してほしい」という要望を受けることもある。

毎日の家庭学習の課題を個々に設定するのは難しいが、タブレット端末によって子どもの意欲や学習進度の差に対応しやすくなった。例えば、夏休みの課題に1問1答式のデジタルドリルを課したが、これは課題が終わるとチャレンジ問題が出される。この機能を活用し、自主的に先に進む子どももいた。また、正解するとキャラクターが成長する機能もあり、それも家庭学習の動機付けになっていると、5学年担任の中島清香さやか先生がいう。

「デジタルドリルは同じ問題に何回も取り組めます。子どもはキャラクターを成長させようと、繰り返し取り組みたくなります。間違えた問題だけが出される機能も、子どもの意欲を刺激しているようです。問題を解けるようになる楽しさが、次の学習のベースになっている姿が見られます」

また、動画や画像を記録する機能は、授業と家庭学習をつなぐ課題を設定しやすい。

家庭科では、自分が作った朝食をタブレット端末のカメラで撮影する課題を出し、授業で発表した。以前は絵を描いて行っていた活動で、絵が苦手な子どもは発表に消極的だったが、写真を使うことで発表が活発になった。同様に、学級活動の時間では、家族やペットなどを撮影して、家庭での生活についてプレ

ゼンテーションを行った。今年の夏休みには、雲の形を撮影する課題を出した。夏休み明けの気象の授業で活用する予定だ。自分が写した写真と気象の現象を結び付けて考えることで、意欲や理解を深めることがねらいだ。

プロジェクトによって各家庭のインターネット環境が整備されたため、調べ学習も課題に出すことがある。例えば、社会で自動車工業を学習する授業の前に、自動車会社のホームページを閲覧する課題を出した。家庭で準備することで、自信を持って授業に臨む姿が見られ、また、あらかじめ予習をすることで、授業をテンポよく進められることにもつながっている。

このように、ICTを活用した家庭学習を取り入れ、子どもの意欲向上や授業のねらいに効果的な活用法を探っている。

こうした授業づくり、家庭学習の課題設定を進める上でICT支援員の支援が欠かせないと、和田校長は強調する。

「教師はICTの全てを知っているわけではありません。『子どもにこんな力を付けた』という教師の希望に、ICT支援員から提案をいただけるのは、本当にありがたいサポートの必要性を痛感しています」

ICT活用は、保護者の理解を促しながら進めることも大切だ。ICTの重要性を認める保護者が多いが、やはり、タブレット端末の必要性を疑問視したり、ゲームのようなイ

家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

メッセージを持ったりする保護者もいる。

「これから必要となる力であることを説明し、情報モラルに関する不安にも対応しながら、保護者に理解を求めています」（和田校長）
 「連続1時間以内」と使用時間を設定して周知するなど、ルールづくりも進めている。

●取り組みの成果

個々の学力・理解度に合わせて進めることが意欲につながる

試行段階ではあるが、これまでの取り組みから教師はさまざまな成果を感じている。

まずドリル学習に何回も取り組めるなど、タブレット端末は、基礎・基本の定着に向いていることを実感した。

「自分のペースで進められるため、家庭学習にも適していると感じました。自分でどんな先に進む子どももいれば、間違えた問題に繰り返し取り組み、定着を図る子どももいます。進度と意欲に応じた対応が出来るのがICTの良さだと思いました」（中島先生）
 授業中の発表や話し合いが活発化したことも大きな変化だ。

「言葉だけでは上手に説明できない子どもも、タブレット端末を使うことで発表しやすくなります。『皆が理解してくれた』と実感して、発表することに自信を付けた子どももいます」（吉谷先生）

課題である学力の二極化への対応という点

でも可能性を感じている。

「理解が早い子どもは、ICTを活用してより分かりやすい発表の方法を考え、表現の幅を広げていきます。理解が遅めの子どもは、可視化された分かりやすい発表を聞くことが理解の助けになります。このように、ICTは一人ひとりのハードルに応じて意欲を引き出し、学習をサポートできるツールだと思います」（田口先生）

学校全体で取り組みを進めるために、他学年の教師も子どもの変容を見たり、校内研修で情報を共有したりしている。特に、学習意欲の面で大きな成果が見られたことから、「ICTを使ってみたい」という教師が増えていく。更に子どもからも「もっと使ってみたい」という声が出たため、当初は5年生のみの計画だったが、6年生も継続することにした。

一方で、従来のノートやプリントが適している学習活動があることにも気付いた。例えば、ICTは正誤の判定がすぐに出るため、誰がどの問題でつまづいたかが分かりやすい半面、思考のプロセスが残らず、「どこまで理解しているか」ということが見えにくい。理解度を把握したい時は、ノートに考えの軌跡を残させる指導が必要だと考えている。
 同校では、授業と家庭学習をつなぐ際にも、こうしたICTの性質を見極めて紙の教材と併用しながら、意欲的に学びに向かう子どもを育てたいと考えている。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教師それぞれに得意・不得意があるものです。若手教師も十分に力を発揮できるように、学校全体がチームとして取り組むことを大切にしています。

ICTは、実際に教師自身が使う中でどのような指導で効果的に活用できるのかが見付かるのだと思います。研修会を行い、教師個々のスキルアップを支援することが必要です。そのような機会を増やすことで、仲間同士が助言し合う関係をつくりたいと考えています。

校長 和田淳二先生

ミドルリーダーの役割

本校ではICTを活用した取り組みは高学年のみですが、研修などを積極的に実施して、先生から先生へとノウハウや成果をつなぎ、全校に広げていきたいと考えています。

ICTは、機器の操作に慣れることがとても重要です。若い先生の方が操作に長けていることも多いため、周囲のアドバイスに耳を傾けてスキルを身に付け、いい形で授業に組み込んでいきたいと考えています。

5学年主任 吉谷良子先生